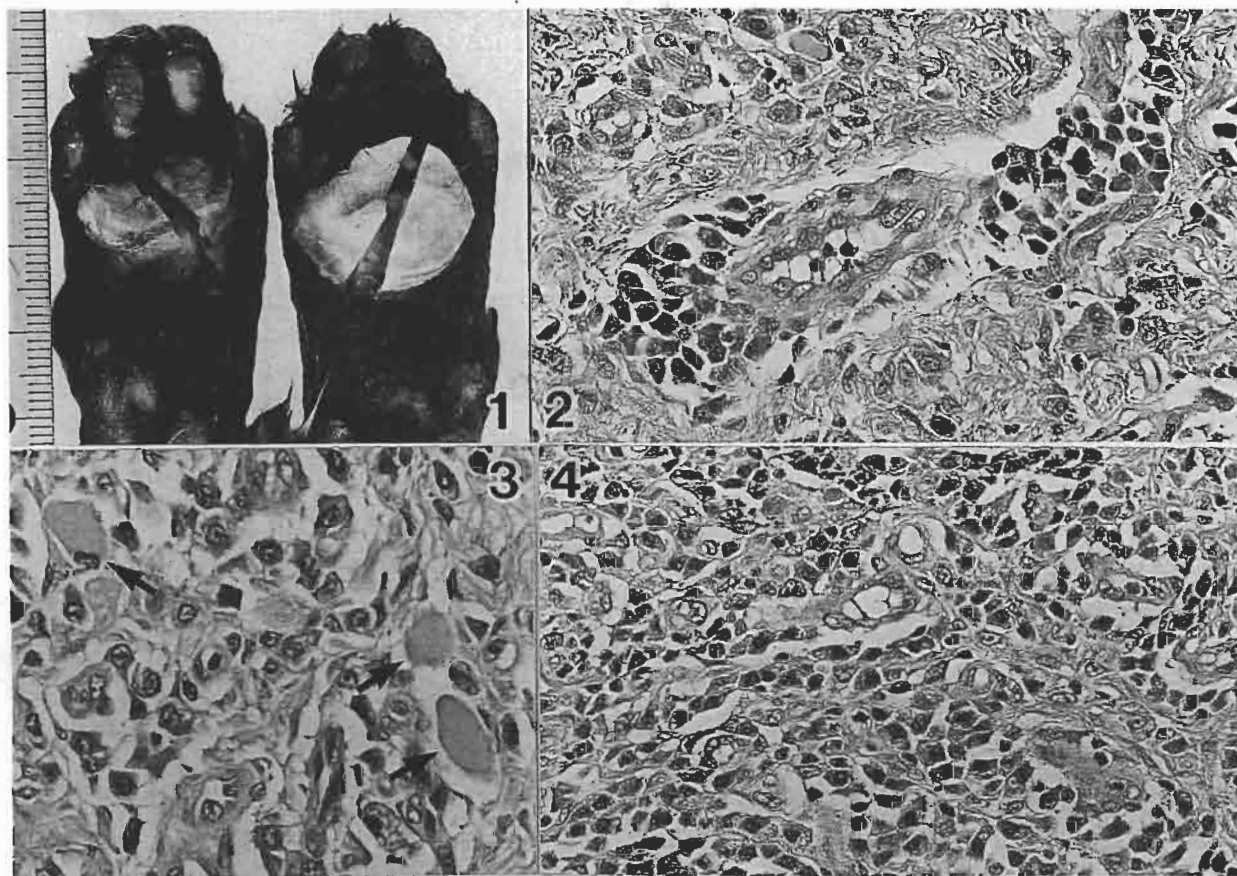


猫の肉球

株式会社三菱化学安全科学研究所 第36回獣医病理学研修会標本No.659



動物：猫，雑種，雄，年齢不詳(成獣)，体重2.0kg。

臨床事項：本症例は迷い猫であり，衰弱しているところを保護され，獣医師の元へ届けられた。しかし，20日間の施療の後予後不良とみなされ安楽殺された。外表所見で消瘦，黄疸のほか両前肢掌球および両後肢足底球に表皮のびらん・潰瘍を伴ったぼう膨隆がみられ，両前肢で顕著であった(写真1)。また躯幹や四肢では脱毛が目立ち，抜毛も容易であった。血清学的にはFeLV陰性，FIV偽陽性であり，安楽殺時の血液検査では貧血，白血球増多，血清トランスアミナーゼ値の上昇が認められた。

剖検所見：四肢肉球の変化に加えて，肝臓が腫大し小葉構造が明瞭になっていた。

組織所見：肉球では形質細胞の浸潤が特徴的であった。即ち，形質細胞やリンパ球の浸潤集簇が主に血管周囲性に認められ(写真2)，巨大なラッセル小体を有する形質細胞も散見された(写真3，矢印)。好酸球はほとんど認められなかった。表皮に腫瘍が形成されていた両前肢掌球では，真皮から皮下織にかけて著しい炎症性細胞浸潤を伴った肉芽組織の形

成があり，形質細胞の集簇はその中に混在(写真4)して，あるいは皮下織深部で認められた。肉球以外の皮膚や他の臓器にはこのような変化は認められなかった。病巣内の形質細胞は，電顕的に車軸状核と豊富な細胞質および発達した粗面小胞体の特徴的な成熟形質細胞であり，免疫組織化学染色で抗ネコIgGに陽性で，抗ヒトlight chain κ 鎖， λ 鎖共に陽性を示したことから，炎症反応により出現したpoly-clonalな細胞と思われた。

組織診断：本症例では，形質細胞の浸潤集簇が顕著な皮膚炎が四肢の肉球に限定して認められたことから，診断を「猫形質細胞性足底部皮膚炎」とした。

考察：四肢肉球以外では，検査した臓器のうち肝デイツセ腔，胆嚢粘膜固有層，赤脾髄索，腎尿細管間質，副腎皮質血管壁および甲状腺濾胞周囲にアミロイドの沈着が認められた。これらのアミロイドは過マンガン酸カリに感受性を有し，抗ヒトアミロイドA免疫染色で陽性を示した。したがって本症例は，形質細胞性足底部皮膚炎に全身性の続発性アミロイド症を併発していたものと思われた。